砂漠にまどろむ白亜の揺りかご

エジプトの白砂漠の驚異的な地質学的特徴と壮大な歴史は、
今日の私たちの理解を超えている。太古の昔、この地域は緑豊かで
肥沃だったが、ファラオの時代以降、乾燥地帯となって、現在に至る。
驚くべき過去を秘めた、気が遠くなるほど美しい場所を旅する。

文 サイモン・イングス
写真 キャサリン・ハイランド

［前見開きページ］
白砂漠のエルジャヤメ（または
サハラ・アルベイダ）では、
砂漠の向こうに、風化の
進み方によって姿が異なる
硬質な岩が、チェスの
駒のように立ち並ぶ。
［当見開きページ］
（左）砂漠や岩肌の色は刻々と
変化していく。太陽が
沈むにつれて、オレンジから
ピーチへと、暖かい色の輝きが
移ろう様子が見られる。
（右）雪崩を連想させる
この岩には、何百万年も前の
ハマグリやウニなどの化石が
含まれ、海底だった時期が
あることを物語っている。

カイロの南西560キロ。68万650平方キロに及ぶエジプト西部砂漠の窪地の真ん中に、ファラフラと呼ばれる町がある。そこにはオアシスがあり、古くから続く家は、それぞれ十分な広さの庭を持っている。デーツ、オリーブ、レモンが育ち、この町はこれまで食糧難に見舞われたことがない。温泉にも恵まれ、地熱エネルギーを利用した、町への電力供給計画が、長年議題となっている。今のところ、町から車で5分ほど離れた平原の地下にセメントの貯湯槽が設けられ、住民のリフレッシュや、この地域を訪れる数少ない観光客の娯楽に役立てられている。

ファラフラには、この地で生まれ育った人々が5000人ほど暮らしているが、彼らにアラビア語で話しかけると、ガイドブックに書かれているエジプトとは全く異なる場所に来たように感じる。特に、年配者は方言が強く、砂漠を緑化する政府の鑿井（さくせい）事業に従事するため、ナイル川のデルタ地帯から来ている数万人のエジプト人も、途方に暮れるという。

ファラフラは、カイロの文化圏から少し外れている。それもそのはず、ここはリビアとの国境に近く、中心部には、昔の交易路を記憶している遊牧民、ベドウィンが居住している。さらに重要なのは、歴史が古いということ。カイロはもちろん、5000年の歴史を持つテーベ（現在のルクソール）よりも古いのだ。この地域には、少なくとも1万年以上前に集落が成立していた。分かっている限り、ファラフラより古い集落は、エジプトには存在しない。ファラフラを中心とするこの地域は、人が定住する術を学んだ場所なのだ。

現在、地球上で最も乾燥した場所のひとつに、緑の前哨基地が残っているというのは、とてもロマンチックな話だ。植民地時代、手帳とコンパスを携え、オアシス伝いに、シワからバハレイヤ、ファラフラ、ダフラを経てハルガまでたどり着いたヨーロッパの地理学者や冒険家、考古学者たちは、足元の砂の下にエデンの園の亡骸が埋もれていると考えていた。彼らは間違っていない。ファラフラから南西に車で数時間ほど離れた洞窟の内部に、ヤギやガゼル、キリンといった動物、そして当時の生活を裏づける舟を描いた石器時代の壁画が残っている。

砂漠がかつて海底にあったことや、そこに花が咲いていたことは、容易に想像できる。問題は、現在、白砂漠国立公園になっているこの地域が、いつ乾燥したかということだ。この一帯は、ファラオの時代にはすでに砂漠化し、ファラフラは地中海とリビアのサハラを結ぶルート上の中継地に過ぎなかった。放牧も採石も行われず、あの不撓不屈のローマ人がこの地を占領した際にも、数本の掘り抜き井戸が設けられただけだった。それでも、失われたエデンというロマンチックな夢は色あせない。この地域はなぜ、「タ・イフト（牛の土地）」と、

ダフラとバハレイヤの
オアシスのほぼ中間に位置する
ファラフラのオアシスは、
西部砂漠のなかでも白砂漠に
最も近い、孤立した場所にある。
古代交易路の水場だった
歴史を持ち、ファラフラの
人々には庭園（左）を、農業や
羊毛貿易を支える羊、
ラクダなどの草食動物には
肥沃な土地を提供する。
ナツメヤシから新鮮なデーツが
手摘みで収穫され（右上・右中）、
木陰では牛が草を食む（右下）。

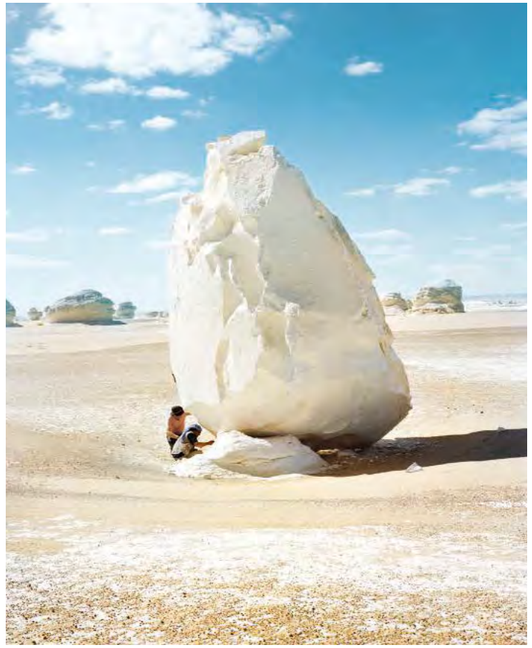
かつて呼ばれていたのだろうか。

興味深いことに、ここではウシの化石が全く出土していない。ラクダの化石は出ている。ガゼルやダチョウもだ（ダチョウの卵の殻は器として役立っていたので、この地域の人々が陶器をつくろうと思いつかなかったのも納得できる）。それなのになぜ、ナイル川を中心とする文明は、乾燥し、荒涼とした、この辺鄙な砂漠の一角を、豊饒な土地として記憶しているのだろうか。過去四半世紀にわたる考古学的研究が、その答えを見つけた。この文明はナイル川から始まったのではなかった。ファラフラ周辺の湿地帯で生まれたのだ。土地が乾燥するにつれて、牧畜と農業の習慣は東へと広がっていった。

白砂漠へは車で行けるが、ガイドなしで訪ねるのは得策ではない。ラクダで1週間の探検の旅がベストだ。この砂漠は山が多く、片持ち梁のように突き出た雲状の奇岩群が見られる。その形は、まさしく雲のように、測ることも覚えておくこともできない。この風景は、車で行くより、歩きながら楽しむべきだ。谷間の平地を20分ほどのんびりと歩いて横切るだけで、丸一日トレッキングしたかのような充実感を味わえる。

あり得ないような姿でそそり立つ岩の高さは、砂丘より低い。砂と風が谷のチョーク岩を氷河のように侵食している場所では、撮った写真がどうしてもアイスランドの風景にしか見えない。振り返ると、風に吹き寄せられた砂が、山の裂け目から流れ込み、キャンプを見失ったことに気づく。よし、歩こう、気を引き締めて。光の変化が、あらゆるものの色を塗り変えていく。ここには、二方向から同じように見えるものは絶対に存在しない。対称性とは無縁の世界なのだ。

白砂漠は、確かに白いのだが、太陽光が古代湖の跡に残ったチョーク岩で屈折し、風景をあらゆる色に染める。あり得る限りのオレンジ色、



［前ページ］
何世紀もの間、砂嵐に侵食された岩は、彫像のような姿で砂漠にたたずむ。人の顔のように見える岩（右上）。巨大なキノコあるいは木と、その横にうずくまるニワトリ（左上）。剥き出しの巣の上に立つ巨大な卵（右下）。木や石を彫るノミのような形の岩（左下）は、そのまま記念碑として使えそうだ。
［当ページ］
1980年代から開発が進むファラフラの町。プリキ屋根のモダンな建物とは対照的に、ファラフラの伝統的な土の家は、その多くが荒れ果てている。現在、住民の多くが、町の中心部を取り巻くように拡大する集落で暮らしている。

藤色。夜明けには、思いがけない北極の青があらわれる。暗い縞模様は、大昔の火山に由来する鉄の塊か、あるいは石化したアカシアの残骸であることが分かった。地面には、石化した小枝の断片が散らばっている。チョーク岩に根づいた状態で石化したギョリュウの若木の細い幹は、手で割れるほど柔らかい。

この地域は長い間乾燥していたため、地質はもはや雨を覚えていない。排水路や側溝の跡、川床すらなく、かろうじて残った古代湖の岸も、風と砂ですっかり削られ、風景のなかで判別するのは困難だ。火星探査機マリナー9号やバイキングの着陸船、軌道船が火星の撮影に成功した時、NASAは地球の衛星の画像ライブラリーから、火星の表面に似た画像を探し出した。それが白砂漠だ。白砂漠の研究は、現在のNASAのミッション計画に情報を提供し、火星の研究を押し進めることに貢献している。

砂漠の別の場所では、かつて地平線まで広がっていた大きな湖の底に立つことができる。このチョーク岩は、侵食されてほとんど残っていないが、わずかに残る孤立した岩塊が、風で運ばれた砂によって下方から侵食され、狭い台座の上に鎮座する巨大な抽象彫刻の秀作のような姿を見せている。その様は、古代都市の議事堂の廃墟や、巨大な石の頭蓋骨、巻貝のような形の玉座、そして（もちろん）スフィンクス、あるいは控えめに見てニワトリなどを連想させる。

奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。しんとした静寂の世界では、音もまた人を不安にさせる。姿を変え続ける岩の間を歩いていると、その下方のえぐれた部分に足音が反響し、増幅され、自分の後ろを軍隊が行進しているかのように錯覚する。ある場所では、腰の高さにも満たない小さな岩の彫刻が、うろこ雲のように数キロにわたって続いている。それは今にもぽっくりと膨らんで、地球から飛び出す機会をうかがっているかのようだ（かわいらしいたとえだが、実際、このあたりの岩は、寂れた大型園芸用品センターに設けられた石庭の飾り物に負けず劣らずかわいらしい）。

奇妙な塔が林立する風景のなかで、視覚と精神は覚束なくなっていく。見たものはすべて、移動するにつれて、姿を変えていく。

砂原に戻ると、踏んだら足を切りそうな軽石が転がり、かつてラクダが踏みならした道路には2本の車線がある。1981年には電気が引かれ、時代と共に、家や病院、学校は電化した。バスですぐのところに立派な大学もある。

ファラフラに帰ってくると、何千年もの間、この町を養い、現在も多少の収入をもたらしている庭園に足が向く。この場所が実際にどのような役割を果たしているのかを理解したい訪問者にとっては、学びのある場所である（ほとんどの観光客が準備不足で、砂漠にちょっと立ち寄るだけで、退散してしまう）。私たちは座ってお茶を飲みながら、デーツの収穫を眺め、ガイドの話に耳を傾ける。彼はホテル経営者、NGOの代表、政治活動家の顔も持ち、砂漠でコンサートを開くミュージシャンでもある。ファラフラでも近頃では、夏は暑く、冬は寒いコンクリートの家に住む家族が増え、町の中心部にあった土造りの家々は、放置され荒れ果てて、姿を消しつつある。寂しい話だが、黙って頷くしかない。

だが、状況は変わっていくだろう。日陰のある曲がりくねった路地に沿って、土の家が並ぶ風景は、地元の住民には古臭く感じられるかもしれないが、欧米から来る観光客の目には、現代的な持続可能モデルとして映る。いつの日か、ファラフラは独特の新しい姿に再建されるだろう。それは、1万年の歴史のなかで初めてのことではない。